

博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和7年5月

長岡造形大学

はしがき

本書は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、令和7年3月14日に本学において博士の学位を授与した以下の者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位の種類	学位記番号	氏名	論文題目
博士（造形）	甲第7号	飯塚 純	星屑に星座を与える —「ファウンド・フォト作品」の制作実践論—

氏名	飯塚 純
学位の種類	博士（造形）
学位記番号	甲第7号
学位授与年月日	令和7年3月14日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	星屑に星座を与える —「ファウンド・フォト作品」の制作実践論—
論文審査委員	主査 遠藤 良太郎 長岡造形大学教授 副査 小松 佳代子 長岡造形大学教授 副査 藪内 公美 長岡造形大学准教授 副査 甲斐 義明 新潟大学准教授

論文内容の要旨

本論文は、作品制作実践者の立場から、遺品整理の偶然によって「発見」した家族写真を端緒に制作した、私の作品《STAR DUST》という「ファウンド・フォト作品」をめぐり、「作品制作とは何か」を問い直す研究である。近年、ファウンド・フォトは「美術的価値を見いだされた写真作品」という意味合いで使われているが、その定義においては「発見」という行為に焦点を当てるか、「発見された写真」そのものに着目するかで曖昧さが残っている。特に、家族写真のような「匿名的ではない私的な写真」を含む場合は十分に論じられてこなかった。

本論文では、筆者が遺品整理で偶然入手した祖母撮影の写真を題材とした作品を中心に、自身の制作プロセスを振り返ることで、独自の「ファウンド・フォト作品」の制作実践論を見いだすことを目的とする。筆者の研究は、従来の「質的研究」や「量的研究」では扱いづらい領域にあたり、小松佳代子が研究する「ABR (Arts-Based Research)」に着目し、近年の小松の研究を仮に「Nagaoka ABR」と位置づけて背景に取り入れる。「Nagaoka ABR」は、アート作品制作の過程を研究対象とし、その省察を通じて得られる知や経験を探究するものである。具体的には、筆者自身の「ファウンド・フォト作品」制作実践に内在する要素を省察し、どのように作品が制作されたかを省察して考察する。本論文は下記の構成と論点をもつ。

第1章では、写真が芸術作品として評価されるまでの歴史を概観し、日常的な「スナップ写真」が「写真史」や「美術史」にどのように組み込まれてきたかを整理する。

第2章では、私の作品《STAR DUST》の制作実践を省察し、その省察から見出した構造に他の作家の作品と比較し、「ファウンド・フォト作品」の布置連関を考察した。特に、「自分で撮影していない写真を扱う制作」「個人史に関わりを持つ制作」「写真を再考する制作」の3点に着目し、「ファウンド・フォト」作品の本質を探究した。また、写真集というメディアに限定して「ファウンド・フォト」作品を考察し、「ヴィジュアル・ノベル型」と「ヴィジュアル・ディクショナリー型」の二つの構造に分類することで、作家の「まなざし」を通じて「物語」と「物語の余白」をどのように提示するかが「ファウンド・フォト」作品の構造にあるという仮説的な定義を得た。

第3章では、《STAR DUST》以降の作品群(《DIALOG》《REPHOTOGRAPH》《MEMORY PACK》《ALBUS BOX》など)を省察し、既存の写真・エフェメラ・スーベニアなど多様な素材を「等価」に扱う制作アプローチを考察する。そこで筆者が「捨てられるはずだった写真」を「星屑」とみなし、制作へと結びつける態度が明確化する。

第4章では、筆者の作品《DOUGHNUT HOLES》《MEMORY/OBJECT: Winged Victory》を例に、あらためて撮影行為や既存オブジェを再解釈した作品制作に着目する。《DOUGHNUT HOLES》の省察では、筆者が「写真」を「愛の情動」が折りたたまれた「光の手紙(ラブレター)」として捉えている点を見出した。また、

《MEMORY/OBJECT:Winged Victory》の省察では、梶井基次郎の『檸檬』を参照し、「美的価値」を見いだす「美的判断」がどのように対象との出会いから生まれ、変容していくのかを論じる。「世界をどう切り取り、どこで区切るか」という「選択」こそ制作の本質であり、その過程で立ち上がる「私のまなざし」が作品を形づくることを示す。また、ZINE との関連から、極めて私的な制作と作品の境界がいかに曖昧であるかについても言及する。

第5章では、アーティスト・イン・レジデンスでのワークショップや新作インスタレーション《STAR LIGHT》、個展「PLAY」などを省察し、鑑賞者が作品に介入するための「二重の余白」や「遊戯」の観点を提示する。また、論文執筆をする中で制作した作品《CONSTELLATIONS》を省察する。

最後に、《STAR DUST》へと立ち返り、写真やエフェメラ、スーベニアを「星屑」として扱い、それらに作者の情動や内的イメージを結びつけ、「星座」を与える行為こそが筆者独自の「ファウンド・フォト作品」の制作論における中核であると結論づける。

本論文で見取った「ファウンド・フォト作品」の制作実践を通じて、従来の「レディメイド」やシュルレアリスムの文脈における「コラージュ」が「ファウンド・フォト」とは異なる性質を持つことを示した。また、作品制作実践者が論文を書く意義についても考察した。制作プロセスを批判的に分析し、学術的文脈に位置づけることで、他の研究者や実践者との対話を促進し、制作実践が知識として共有が可能となる。しかし、制作実践と理論が常に一致するわけではない。既存の理論に無理に当てはめることで作品制作実践の本質が失われる危険性を認識し、常に自らの「美的判断」や制作プロセスを見直す必要がある。

本論文は、私の作品制作実践を通じて「ファウンド・フォト作品」の定義と意義を見出し、作品制作実践者の立場からファウンド・フォトに関する学術的な貢献を果たすものである。

審査結果の要旨

審査委員会による12月13日の審査および2025年1月28日の最終発表会、口頭試問による最終試験、それらの経過の中での討議を経て、また各委員より提出された意見を総合的に鑑み本結果とする。

審査員の審査評を以下に示す。

(主査 遠藤良太郎)

提出論文における探究は、まだ研究として多くのものがあるわけではないファウンド・フォト、およびファウンド・フォト作品について論じたものである。制作行為や制作物の省察において、その行為、物質からなる作品を包含する制作実践について言語で捉えることの困難さは否めず、それどころか、どのようにしても言述不能さを乗り越えることはできない宿命にあるなかで論じることによってどのような本質的な意義が提示できるのか。ここに大変な難しさがある。制作者自らが語る、つまり、作者がそういうのだからそうなのだろうとなってしまうキリのない論拠の提出に、合理的な根拠や明証性を問うことは、かえって制作の本質を見えないものとしてしまう。飯塚さんの、自らの「作品制作とは何か」という問いは、制作者には必ず付きまとい、一度ならず省みずには通り過ぎることはできない問いである。先行研究、表現者、作品に詳細にあたり、布置連関による細部の比較により、自らの制作の語り得がたい核心をNagaoka ABRという研究スタイルを持って、ドーナツの穴を浮かび上がらせるように論述を尽くした研究を評価したい。

(副査 小松佳代子)

本論文は、1980年代以降、美術領域で論じられるようになったファウンド・フォトについて、写真史や美術史における位置づけを論じたうえで、私的な写真や日常的な物を素材にして制作してきた自らの「ファウンド・フォト作品」に固有の意味を明らかにする。学術的に十分検討されていないファウンド・フォト概念を先行研究・先行作品から整理し、それらと申請者自身の作品とを照応することで、自身の制作実践の意義を問う。これまで10年にわたって制作してきた自身の「ファウンド・フォト作品」は、スナップ写真や古写真、蒐集したエフェメラなど、さまざまなものを自らの「美的判断」に基づいて「等価」に配置することによって意想外の結びつきもたらす、「星屑に星座を与える」ものであったことを見出した。美術家の制作過程における思考やまなざしを、理論と実践を往還しながら開示するアートベース・リサーチの成果である。自らの制作への省察から新たな知見を得るという学術的には難しい課題に取り組み、研究方法論の吟味、先行研究・作品の渉獵、自らの思考と制作行為を再帰的に問う姿勢などによって、美術制作者だからこそ書ける独創性に富む論文であると同時に、学術的な質を担保できている。

以上のことから、課程博士学位に値するものと評価する。

(副査 藪内公美)

本論は、「ABR(Arts-Based Research)」に着目し申請者が仮に定義した「Nagaoka ABR」を研究手法とし、客観的な視点を意識して自己省察が行われた制作実践者による研究である。

研究の目的は、申請者の「作品制作とは何か？」を明らかにすることであり、申請者自身の制作がどのように変遷し、どのような本質を持っているかを明らかにするために、「ファウンド・フォト」の周辺を精緻に読み解き、その意味を再解釈し「ファウンド・フォト作品」を「星屑に星座を与える」と提示することによって解明した。写真史や美術史の中での変遷をたどりながら、先行作品との布置連関を考察し、論理的に自身の作品と「私写真」や「ヴァナキュラー写真」との関連へ論を展開させ論じている。またそれを作品制作において解体することで、日常的で個人的な営みの中に感じられる「美しさ」、「偶発性」の中で起こる「美的判断の変容」をみとり、「遊戯性」や「余白」と繋げて展開した。それは作品として成立する行為として、「美的判断の変容」を「作品制作と同時に作品になる行為」と捉えているからだと理解できる。最新作《CONSTELLATIONS》は、作者と鑑賞者、すでに作品であるものとそうでないものが混在し、本研究の根幹となる「作品とは何か?」「ファウンド・フォトとは何か?」を明解にした。

本研究は、作品制作実践者が論文を書く意義と、作品制作実践が学術的知識へと接続する研究として評価できるものである。制作の展開と合わせて、論やその語彙の定義のゆらぎが絶え間なく起こり、常に自己言及的にしか語れない制作プロセスの中で作品を捉え続けた研究となっている。制作実践者でしかわかり得ないリアリティから丁寧に読み解き、「制作そのものは理論と実践が常に一致するわけではない。常に『美的判断』が変容しているため、多くの矛盾が生じる。」ことや、「直ちに『私』の制作実践論として成立するわけではない。」とも述べており、まさに制作者にとって、知と接続するために作品制作を解体し分析した探究であり、制作実践論に取り組む後進の礎にもなる成果が認められる。

以上のことから課程博士の学位の水準に達していると評価する。

(副査 甲斐義明)

祖父が遺した写真を元に《STAR DUST》を2014年に制作した申請者は、本論において、写真史の文献や過去の他者による作例を参照しながら、現代美術における「ファウンド・フォト作品」の歴史やその構造について論じている。ファウンド・フォトに関する先行研究は数多く存在するが、制作者の視点から論じている点に本論の特色がある。第2章では《STAR DUST》をファウンド・フォトを用いた類似作と比較しながら、自作のどのような点に独自性があるかを明らかにしようと試みている。第3章では《STAR DUST》以外の自作にも考察の対象を広げ、自身の制作行為においてファウンド・フォトの利用がどのような意味を持

っているかについて反省的に論じている。とりわけ《STAR LIGHT》等の近作について述べている箇所では、ファウンド・フォトの利用が、どのように写真以外の素材を用いた作品へと展開していったのかについて語られており、申請者の制作の論理を垣間見ることができる。本論においては、先行研究や先行作品がきちんと参照されており、自作を客観的に捉えようとする態度が見て取れる。こうした客観的・反省的な態度は、今後の申請者の制作活動をより有意義なものにするはずである。写真を用いる現代美術家の制作論として本論は評価に値するものである。